

初学者のための手引書

中央俳句会
事務局長 高松 守信

中央大学ホームページをご覧の皆さま、こんにちは1、この度の私共の二十周年記念俳句募集に、一人でも多くの方々の俳句を寄せて頂きたく、初めて俳句を作るための手引書を作りました。ご参考にお読みください。

目次

- (1) 俳句は誰でも出来る。
- (2) 俳句は季語(季題)を一つ使う。
- (3) 歳時記(季寄せ)とは？
- (4) 俳句は「有季定型」が基本です。
- (5) 字余りは、上五に。
- (6) 有季俳句と無季俳句について。
- (7) 切れ字きれじを一つ使う。
- (8) 俳句は一句一章・二句一章のどちらか。
- (9) 吟行について。
- (10) 句会について。
- (11) 具体的に句会はこんなものです。
- (12) 続句会について
- (13) 月並俳句について
- (14) 月並俳句から写生へ、現代俳句の始まり
- (15) 俳句は推敲が命です。
- (16) 舌頭千遍、口唱する
- (17) 俳句は倦まず弛まず
- (18) 作句への芭蕉の警句、至言(1) 取合せ
- (19) 作句への芭蕉の警句、至言(2) 不易流行

手引き本文

(1) 俳句は誰でも出来る。

俳句は、誰でも出来るやさしい文芸です。何処にいても出来る楽しいものです。仕事中でも、電車の中でも、商談中でも作れるのが俳句です。目の前に見えるもの、頭の中に見えるもの、何でも材料になります。只俳句は一七文字、五七五で綴る短詩のため、少し約束事があります。なに其れも大したことではありません。

(2) 俳句は季語(季題)を一つ使う。

俳句は「季語」を原則一つ織り込みます。俳句は短詩ですから、省略の手段として、季語が活躍するわけです。この季語の入った俳句を「有季俳句」といい、これが俳句の基本です。季語が省略の働きをするのは、日本人が歴史の中で身に付けてきた自然、人事、生活、動植物に対する感情、見方等を表すからで、説明が省けるわけです。俳句を読むには、季語の理解が無くては叶いません。季語を集めた「歳時記」、または簡略化した「季寄せ」をお手元に一冊備えましょう。

(3) 歳時記(季寄せ)とは？

俳句の歳時記は旧暦、陰暦により新年および春夏秋冬を3ヶ月ごと大別しています。例えば春は、二月四日ごろが立春で、終りは五月六日ごろで、ご存じのことと思います。

俳句は、この春夏秋冬に従い、目の前の景を詠うものですが、このことを当季詠、または当季雑詠と言い、基本の一つです。また俳句は、今(過去、現代、未来の今)の景を詠いますので、日記、生活史の働きもします。

(4) 俳句は「有季定型」が基本です。

俳句は、五・七・五の十七字を定型とし、季語を一つ使う、これを有季定型と云い、俳句の基本です。有名な「古池や蛙飛びこむ水の音」も、この基本が守られています。この基本につき、俳句を詠む人は大変な努力をしております。ただ定型を外れる句も沢山あります。五七五を超えれば「字余り」不足すれば「字足らず」、またこれらを破調句ということもあります。

(5) 字余りは、上五に。

俳句は十七音、五七五の定型詩だが、字余り、字足らずが、作中往々発生することがあります。例えば、〈風の余燼の落葉月夜となりけらし〉(石原八束の代表作)の「風の余燼の」は七音で二音多く、これが字余り。筆者は、字余りは、上語に持つて行くようにと教えられました。理由は口唱リズムを調え易いからです。又字足らずは助詞助動詞等で補うと良いとも。

(6) 有季俳句と無季俳句について。

俳句は季語を一つ使用するといいましたが、十七文字の中にこの季語の入っている俳句が有季俳句で、俳句の大事な約束ごと。大方はこの原則に立って作品を詠んでいます。初心者の守りたい一事です。何事も原則に対し例外があるように、俳句でも季語を使わない「無季俳句」があり、戦前俳句革新運動に乗る一派の形成がありました。現在では、有季俳句大勢と考えて良いでしょう。

(7) 切字きれじを一つ使う。

切字は俳句の大切な用法で、これを使用することで、内容を深め、また作者の意を強調したり、暗示したり、調子を整えたりの働きをします。代表格として「や」「かな」「けり」があります。一例、芭蕉の〈古池や蛙飛びこむ水の音〉の古池やの「や」がそれで、一七文字を区切り、強調、暗示の働きをしています。但し、切字の二つ以上の使用は分裂俳句となり、逆に意を弱めるので禁じ手となっています。

(8) 俳句は一句一章・二句一章のどちらか。

俳句は、一句一章か二句一章になっています。一句一章は一物仕立てとも云われ、季語を表現して、上五から下五まで読み下す俳句です。例句で確認して下さい。

〈白牡丹といふといへども紅ほのか〉 虚子

一方、二句一章は、二つの物の配合でイメージ、想いの展開を図る手法です。これは一句の中に、切字または切れを一カ所作る事で、句を二分することでその内容が作用し合い、響き合う事で効果的に詩情を高める手法です。これも例句で見よう。

〈艦といふ大きな樫沖縄忌〉

夫佐恵

(9) 吟行について。

吟行。字面からも、詠い行くと読めるように、俳句作りの一つとして、戸外に出て、名所旧跡に限らず、句作りの感動、体験等を得ることを言っています。独りでもグループでもよく、グループの場合、現地で句会を持つことも一般化しており、句作りの楽しみの一つとして加えることも良いでしょう。自然に親しみ、又世の中の動きにも触れることで、視野を広げることにもなり、句の幅を広げる上でも、大事です。

(10) 句会について。

俳句会を略して句会と通称しています。短歌の会を歌会と言うのと同じ。文芸は基本的に個人的作業ですが、俳句は同好者が一堂に集い、お互いの作品を選び批評しあい、腕を磨いていくのが一般的。句会は全国のどこにでも在るので、積極的に参加しよう。独学の人も多いと思われませんが、独りよがりの作品になりがちが難点でといえましょう。

(11) 具体的に句会はこんなものです。

句会―主催者(師、幹事等)の兼題(事前に選んだ季題を言う)を連衆(参加者)が事前に詠んで、当日無記名で発表。このとき使用するのが、白紙の短冊。普通二句から一〇句位を詠む。句座の大小または主催者の考えで句数を決めます。句会はこの出句から始まり、清書↓清記と言う―者が書くことで作者名を見えなくし、選句に入る。これを互選、一般選と言う。これとは別に主催者の選句が先生選で、当日の入選句となります。スポーツにも似たスリル、快感が生まれると申します。

(12) 続句会について

清記を連衆全員に回覧し、選句が終わると、句会の山場の披講(選句を発表すること)に入ります。披講者はベテランに一任する場合と各人の場合があり、大句会は、ほぼ特定の披講者に委ねるようです。それは、主に句会の進行と、はっきり読んで貰うため。句会の披講は句会を盛り上げ、成功させる上で重要なもの。披講が始まると句会は張りつめた空気が流れます。連衆全員の至福の一刻。なお句会の大小は、大凡30人以上が大句会、それ以下は中小句会と考えて良いでしょう。

(13) 月並俳句について

この言葉は、正岡子規が、旧来の俳句に対し用いたもので、月並俳句、略して月並として否定したもの。日常用語としても、今日定着している通り。これは、江戸末期の俳句が月の一定日に行われ、宗匠による高点取り、人気取り等で、点取俳句と揶揄される無気力俳句に落ち入ったものを指しており、俳句を評するに、月並だと言えば、これは陳腐だ、つまらぬと言われた事になります。

(14) 月並俳句から写生へ、現代俳句の始まり

月並から写生へ↓俳句は芭蕉後、蕉風尊重が中心だったが、解釈から多数の流派が生まれ、特に江戸俳句中興の蕪村、一茶以降、宗匠の利権化が進み、自派拡張、大衆迎合、遊興化、点取に身をやつす等パターン化した。今日の俳句は、月並を否定するところから始まったといえます。すなはち子規の写実、感情、芸術性等絵画の写実をヒントにした写生句なるべしとの俳論が、今の俳句確立の基礎として生きています。

(15) 俳句は推敲が命です。

俳句は見たもの、感じたものを句帳に記入するところから始まります。これが初稿です。これはメモ的のもので、内容、用法、季語はどうか等チェックし、作品の完成度を高めます。この推敲が俳句の命です。

例↓六月一日は鮎の解禁日、わが家の前川にも、早速釣人が並ぶ。

① 鮎解禁顔ぶれ去年と同じかな

と浮かんだ。これが素案句、より完成へと推敲に入る。いつ、何処等の五W、また句の調子、景色が見えるかをチェック。素案に動き、全体が今一つである。

② 鮎釣に去年の顔ぶれ並びけり

と中七を入れ替え、下五に景が見える具体的言葉を入れた。上五も説明的と元に戻す。成句とする。去年は「こそ」。

③ 鮎解禁去年の顔ぶれ並びけり 守信

(16) 舌頭千遍、口唱する

これは、私が初学の頃に先輩俳人から教えられた一つで、出来た作品を舌頭に乗せ、口承してみよ、良い作品になつていればリズム良く舌頭を転がるはずだ、若し流れに問題があれば、それは、未だ推敲の余地があるからだと考えられる、と云うものでした。良き俳

句はリズム良く口唱出来ると云うわけです。

(17) 俳句は倦まず弛まず

俳句にも、スランプがあります。一応のレベルに達したものが陥る点で、他の芸事、技能と同じと言えます。ある時「詠めなくなつた」、「難しい」と嘆く仲間に対し、師事する文挾先生は、「だから止められない。」「易しかったらすぐ飽きる。」と諭された。ただし至言で、倦まず弛まずが、特に俳句作りの要諦と言えます。ちなみに文挾先生は、今年九十九才の現役俳人で、南甲俳句会が長く指導頂いた現俳壇の老大家。余談ながら今年の蛇笏賞受賞の人。

(18) 作句への芭蕉の警句、至言 (1) 取合せ

俳句は取合せなり↓季語と詠みたい景を組み合せて作句すること。一般に「二物衝撃」と言い、季語と異なる世界を取合せて作ることです。芭蕉句でみよう。「山里は漫才遅し梅の花」↓句意は、この頃来る漫才がまだ来ない。梅の花が咲いたのに。楽しみにしている漫才と共の梅の花、待春の気持が読む者に沁みます。この様に、季語の梅と直接関係ない漫才との組合せ、これが取合せです。

(19) 作句への芭蕉の警句、至言 (2) 不易流行

不易流行↓世に変わらない (普遍性) と今に変わる (新しさ) が作句に大事と言うことです。今日では俳句に手を染めた人なら、知らない人は居ない大事な考え方の言葉。日本の伝統と新しみの言葉の発見、斡旋を心がけよとの主旨です。芭蕉の弟子、支考は、この解説で「古池や蛙飛び込む水の音」が不易流行の句とする芭蕉の自負を紹介しています。水の音の斡旋が当時の意表を突いた新しみ、でありました。

*なお、今回の俳句募集に関するご質問は、中央俳句会事務局で何でも受け付けます。